漢唐時代の都市計画における「中軸線」について

陳　　力

漢唐時代の都市計画に関する研究の中，「中軸線」(「軸線」,「設計軸線」,「中心線」などの言葉でこれを表現する場合もある）という概念がよく使われる。しかし，「中軸線」という概念が精確に定義されていないため，都市の「中軸線」に対する理解も論者ごとに異なっている。たとえば漢の長安城の場合，その「中軸線」が安門,「安門大街」の一線に位置する説もあれば，西安門，未央宮前殿，未央宮北司馬門の一線に位置するという説もある。このため,「中軸線」という概念を整理し，これを明確化する必要があると思う。小論で検討したいのは,「中軸線」の特徴,「中軸線」の原理,「中軸線」の変遷の三つの問題である。

Ⅰ　「中軸線」の特徴

漢唐時代の文献にある「軸」という言葉はたいてい「車軸」,「権力の中枢」,「天軸」,「地軸」などの場合で使われ，文献に都市の「中軸線」もしくは「軸線」,「中心線」のような言葉遣いはなさそうである。しかし，これまで考古発掘によって発見されたほとんどの漢唐時代の都市遺跡に，宮殿などの大型建築が直線を呈して配置される現象が存在し，都市内の建築，道路網の方角などはこの直線を参照して決められるのである。このような直線が都市の計画基準線であると思う。

ここで，まず唐の長安城と北魏の洛陽城の計画基準線を見ておきたい。

唐の長安城の計画基準線については，学界では異論はほとんどない。つまり，唐の長安城の計画基準線は二つの基準線より構成され，その一つは明徳門，朱雀大路，朱雀門，太極殿，玄武門の一線に位置する南北方向の基準線であり，二つ目は春明門，皇城前の大通り，金光門の一線に位置する東西方向の基準線である。

北魏の洛陽城にも二本の計画基準線がある。その南北方向の基準線は宣陽門，銅駝街，閶闔門，太極殿の一線に位置する。この直線の両側には，太社，太廟などの儀礼施設および太尉府，司徒府など官庁施設が置かれている。城外の圜丘もこの南北線の延長線上に位置する。洛陽城の東西方向の基準線は西陽門，東陽門の一線に位置するのである。

唐の長安城と北魏の洛陽城の都市計画基準線を見て，その特徴を次のようにまとめられると思う。

1．都市計画基準線は東西方向の基準線と南北方向の基準線より構成され，その方向はそれぞれ正東西方向ないしは正南北方向である。二本の基準線の交差点は宮城もしくは皇城の正門付近にある。

2．東西方向の基準線と南北方向の基準線は，かならずしも都市の中心部を通過するに限らない。たとえば，唐の長安城の東西方向の基準線はやや北に偏り，北魏の洛陽の東西方向の基準線がやや北に，南北方向の基準線はやや西に偏っている。

3．南北方向の基準線は城内の南北メインストリート，宮城・皇城の南，北壁の中門，朝礼を行う最も重要な宮殿（太極殿など）を通過し，その両側に主要な官庁施設，儀礼施設がある。

上述した唐長安城及び北魏洛陽城の計画基準

無断転載禁止。

線の特徴が中国中期封建社会の都城の計画基準線の標準的特徴であると考えられる。このような特徴は中国早期封建社会の都城の計画基準線の特徴から発展してきたものであろう。

「中軸線」という語彙を使う論著を読めば，唐の長安城と北魏の洛陽城の「中軸線」が，すなわち上述した唐の長安及び北魏の洛陽の都市計画基準線そのものであることがわかる[1]。漢唐時代における都市の計画基準線の位置が必ずしも都市の中心部に位置しないので，「中軸線」という呼び方で都市計画基準線を称することが適切とはいえないと思うが，学界では「中軸線」という語彙がすでに広く使われているので，小論でも「中軸線」という呼び方を用いて都市計画基準線のことを称する。同時に，便宜のために小論では中軸線にある東西方向の基準線を横軸と称し，中軸線にある南北方向の基準線を縦軸と称する。

ところで，上述したように漢長安城の中軸線については，二つの意見がある。つまり漢長安城の中軸線が安門，「安門大街」の一線に存在する説と漢長安城の中軸線が西安門，未央宮前殿，未央宮北司馬門の一線に位置する説がある。両説を上述した中国中期封建社会の都城中軸線の特徴と比べれば，後者は特に前述した3の特徴と彷彿するが，前者は北魏・唐だけではなく，宋代以降の中国封建都城でもこれと類似するものが見あたらない。中国中期封建社会の都城中軸線に現れている特徴は漢代から伝承してきたものなので，漢長安城の中軸線は西安門，未央宮前殿，未央宮北司馬門の一線に位置すると考えてよかろう。

文献からも，漢長安城の中軸線が西安門，未央宮前殿，未央宮北司馬門の一線に位置する説を支える資料が数多く見えるのである。たとえば，『文選』巻二張衡『西京賦』に，

　正紫宮於未央，表嶢闕於閶闔。

とあり，『文選』李注引辛氏『三秦記』に，

　未央宮，一名紫微宮。

また『文選』李注引『春秋合誠図』に，

　紫宮，大帝室，太一之精也。

とあり，『漢書』天文志に，

　中宮天極星，環之匡衛十二星，藩臣也。皆曰紫宮也。

とある。これらの記載によれば，未央宮は紫宮という宇宙の中心とされる星座に相当し，長安城の中心点とされていた。この中心点は当然都城設計の中軸線の上に位置するはずである。「紫宮」に相当する未央宮については，『史記』巻八高祖本紀正義に，

　未央宮雖南向，而當上書奏事謁見之徒皆詣北闕，公車司馬亦在北焉。是則以北闕為正門，而又有東門，東闕。

とある。未央宮の正門である北闕は未央宮前殿の真北にあり，北闕以外の広場の両側に高官の邸宅がある。さらに北へ進めば，漢長安城のメインストリートである横門大通りがあり，その両側に東市，西市がある。城外に至ると渭水を跨る大橋があり，さらに北へ行けば，高祖の長陵およびその他の礼制建築がある。この直線上にある主要建築とその両側に対称的に存在する高官邸宅，市場，礼制建築などは，この直線の中軸線的性格を示している。

Ⅱ　「中軸線」の原理

なぜ中軸線という十字形の計画基準線が引かれたのであろうか。中軸線はどんな方法で設けられ，中軸線には古人のどんな思想が潜まれているか。

新石器時代の集落の配置をみれば，少なくとも仰韶文化時期の集落，たとえば半坡遺跡，姜寨遺跡に中軸線らしいものはなかった。殷の尸郷溝故城の最新発見によれば，その宮室建築，宮城の北門，郭城の北門が同じ直線上に位置し，この直線はおそらく中軸線の性質があると思われる[2]。後に述べるように，東周時代のほとんどの都市に中軸線が存在するようになった。

文献によれば，都城を建設するとき，たいてい「定宅」（都城計画中心点の選択），「平地」（建設用地を整える），「攻位」（建設基準線の測量および宮室建築位置の確定）の三つの段階が

無断転載禁止。

ある。

「定宅」とは，占いで選定された都城建設地域で建設しようとする都城の中心点を選ぶことである。その過程については，『尚書』洛誥に詳しく記載されている。

予惟乙卯，朝至於洛師。我乃卜河朔黎水，我乃卜澗水東，瀍水西。惟洛食。伻来以図，及献卜。王拝手稽首曰，公不敢不敬天之休。来相宅，其作周匹休。

中原地区で周人の拠点をつくることは周の武王時期に定められた既定政策であった。武王に選ばれた地域は「天室」と呼ばれる伊水・洛水平原であった。伊洛平原で都市を建設することは人間によって定められるが，廣い伊洛平原のどの位置で都市建設の中心点を置くのは，天の意志（占い）に遵うのである。洛邑建設の場合，洛，黎水，澗水東，瀍水西などの地点も都市建設中心点の候補地であったが，占いの結果によれば，洛だけが「食」（吉）であるので，周人は洛で新都を建設したのである。

次に行われるは「平地」である。『考工記』匠人建国条に，

匠人建国，水地以県，置槷以県，眡以景。

とある。その鄭玄注に，

於四角立植而県以水，望其高下，高下既定，乃為位而平地。

とある。

「平地」の次に，「攻位」が行われる。『周礼』に天，地，春，夏，秋，冬の六つの部分がある。各部分の冒頭にいずれも「惟王建国，弁方正位，体国経野，設官分職。」の決まり文句があり，その疏によれば「弁方正位」とは都城の方位（向き）を決めることである。さらに，『周礼』巻十大司徒に，

凡建邦国，以土圭土其地而制其域。

とあり，その疏によれば，「土」はすなわち「度る」の意味である。土圭については，同じく『周礼』大司徒に，

以土圭之法測土深，正日景以求地中。日南則景短，多暑。日北則景長，多寒。日東則景夕，多風。日西則景朝，多陰。

とある。その鄭玄注に，

土圭所以致四時日月之景也。測猶度也，不知廣深，故曰測。

とあり，その賈公彦疏に，

深謂日景長短之深

さらに『考工記』匠人建国条に，

匠人建国，水地以県，置槷以県，眡以景。為規識日出之景与日入之景。昼参諸日中之景，夜考之極星，以正朝夕。

とあり，その鄭玄注に，

日出日入之景，其端則東西正也。又為規以識之者，為其難審也。自日出而画其景端以至日入，既則為規測景両端，規之。規之交，乃審也。度両交之中，屈之以指臬，則南北正。

とあり，その賈公彦疏に，

槷亦謂柱也，（中略）云於所平之地中央樹八尺之臬，（中略）臬即表也。（中略）日出日入之景其端則東西正也。

とある。『詩経』定之方中篇にも「定之方中，作於楚宮。揆之以日，作於楚室。」の記載がある。以上の記述によれば，「攻位」は「土圭」，「臬」などの測量器具で東西南北の方角を測定し，得られた方角などにより，宮殿，道路網などの位置を定める行為である。『周礼』大司徒に記載されている「攻位」は「天下の中」を求めることを目的としているが，『考工記』匠人に記録されているのは中軸線の縦軸，横軸を求めるための「攻位」である。このような測量活動によって，都市建設予定地の寒，暑，風，陰，陽，日照などの状況を調べ，適切な都市計画がたてられる。

先秦時代において，「攻位」という行為の中で都市建設中心点を選択するとき，呪術的な行為があるが，それ以外はほとんど建設予定地の気候，風土などを調査する行動であり，呪術的な内容と比べてむしろ質朴な科学的要素がより多いと思う。

しかし，秦の始皇帝時代に至って，都城の中軸線にも変わりがあった。『史記』巻六秦始皇本紀に，

無断転載禁止。

作信宮渭南，已而復命信宮為極廟，象天極。

とあり，同じ『史記』巻六秦始皇本紀に，

先作前殿阿房，（中略）周馳為閣道，自殿下直抵南山，表南山之顛以為闕，為復道自阿房渡渭属之咸陽，以象天極閣道絶漢抵営室也。

とあり，『三輔黄図』巻二に，

因北陵営殿，端門四達，以則紫宮象帝居。渭水貫都，以象天漢，横橋南渡，以法牽牛[3]。

とある。『史記』秦始皇本紀引『三輔旧事』に，

始皇表河以為秦東門，表汧以為秦西門。

とある。これらの記載によれば，秦の始皇帝は六国を統一してから，首都の咸陽の範囲を渭水南岸まで拡大した（以下この拡大された咸陽を新咸陽と称す）。この拡大の工程のなか，『周礼』に記載されている太陽によって東西南北の中軸線を測量するやり方は採用されなく，東西南北の基準線は「表」という新しい手法で決められたのである。『文選』李注に「表，標也。」と記述しているので，新咸陽の南北基準線は南山を南の標識として，この標識と新咸陽の中心の阿房宮との間の直線は新咸陽の南北中軸線である。この南北基準線は阿房宮の前殿と前殿から南山までの閣道より表現している。同じく，東西基準線は黄河と汧水の二つの標識により引かれた。黄河と汧水との間に直線を引けば，この直線が真東西方向ではないので，新咸陽の計画基準線にある「東」，「西」，「南」，「北」の概念はすでに純地理的な概念ではなく，観念的な概念であることがうかがえる。新咸陽の建設思想にさらに「命信宮為極廟，象天極」，「為復道自阿房渡渭属之咸陽，以象天極閣道絶漢抵営室」，「端門四達，以則紫宮象帝居。渭水貫都，以象天漢，横橋南渡，以法牽牛」などの象徴的な手法が使われた。新咸陽に現れるこのような象徴的な設計思想の内容と前述した『周礼』に記載されている都城の設計思想と比べれば，本質的な違いがあると思う。

『文選』巻二張衡『西京賦』に次のような記載が見える。

取殊裁於八都，豈啓度於往舊。乃覧秦制，跨周法，狭百堵之側陋，増九筵之迫脅。

またその李注に，

跨，越也。因秦制，故曰覧。比周勝，故曰跨之也。

とある。この記載は，春秋戦国時代の中国都邑制度のなかに，「秦制」と「周法」の二つの流れが存在したことを推測させる。新咸陽に現れている象徴的な計画思想と『周礼』に記載されている都城の計画思想との差異はつまり「秦制」と「周法」の差異であろう。「秦制」という象徴的な都城計画思想の特徴は都城プランによって世界観を表現することであり，その表現手法は「法地象天」である[4]。都城プランで世界観を表現する伝統は漢の長安城の都市計画に継承され，「周制」の都城計画伝統と融合し，中国封建社会の都城計画思想の主な内容になったと考える。

漢の長安城の計画基準線は時代に従って変動が起こった。前漢中期以前，漢の長安城の中軸線は西安門，未央宮前殿，未央宮北司馬門の一線にあった。この中軸線は漢の長安城の西側に偏っている。王莽時期に至って，古文経の台頭と同時に，『考工記』も現れた。西安門，未央宮前殿，未央宮北司馬門の一線に位置する中軸線は『考工記』にある「面朝後市，左祖右社」という古文経系の都城計画思想と一致しないので，王莽は北城の中門の厨城門を建子門と名を改め，漢長安城の中軸線を変更しようとしていたが，王莽の統治がまもなく終焉を告げ，これ以上の都城の建てかえが行われなかった。

漢の長安城の計画思想には，方術的な内容（主に五行十二支に関係するもの）が含まれている。漢の長安城の方術的な計画思想については，筆者はかつて意見を述べたことがあり，ここで贅言しない[5]。ここで，漢長安城の中軸線について簡単にみておきたい。漢の長安城の計画については，『文選』巻一班固『西都賦』に，

其宮室也，体象乎天地，経緯乎陰陽。拠坤灯之正位，倣太紫之圓方。

とある。『正字通』引『孔子家語』に，「南北為

無断転載禁止。

経，東西為緯」とある。「経緯乎陰陽」とは，漢長安城が陰陽の法則で東西南北の方位を定めたという意味としてとらえられる。前漢の中期以後，陰陽五行などの方術家の思想が儒教に吸収され，特に王莽時期に至って，漢長安城の中軸線に変化が起こり，さらに漢長安城の縦軸及び横軸に十二支の意味が与えられ，縦軸にある城門も子・午の二支に含まれている哲学的な意味で名付けられるようになった[6]。

後漢の首都の洛陽城の計画思想は漢の長安城と類似していると思う。『文選』巻三張衡『東京賦』に，

> 逮至顕宗，六合殷昌。乃新崇徳，遂作徳陽。啓南端之特闈，立応門将将，昭仁恵於崇賢，抗義声於金商。飛雲龍於春路，屯神虎於秋方。

とある。その李注に，

> 崇賢，東門名也。金商，西門名也。謂東方為木，主仁，如春以生万物，昭天子仁恵之徳，故立崇賢門於東也。西為金，主義，音為商，若秋気之殺万物，抗天子徳義之声，故立金商門於西。徳陽殿東門称雲龍門，徳陽殿西門称金虎門。神虎，金獣也。秋方，西方也。飛，飛龍也。易曰，雲従龍，為水獣。春路，東方道也。

とある。これらの記載によれば，顕宗（明帝）以後，後漢の洛陽城の計画に四神，五行思想が含まれている。『東京賦』およびその李注に，洛陽城の縦軸に言及していないが，「金商」，「崇賢」などの宮門の名前からみれば，少なくとも宮城の横軸が五行・四神の原理で作られた。

陰陽五行思想は，魏の鄴の中軸線にもその影響を及ぼした。『文選』巻六左太沖『魏都賦』に，

> 闡鈎繩之筌緒，承二分之正要。揆日晷，考星曜。建社稷，作清廟。

とあり，その李注に，

> 二分，春秋之中者也。（中略）『周礼』曰，匠人建国，昼参諸日中之景，夜考之極星，以正朝夕。

とある。これによれば，鄴城の中軸線も『周礼』に記載されている方法で測量して設けられたのである。鄴城の城門名からみれば，鄴城の中軸線にも陰陽五行的な要素が含まれている。たとえば，鄴の横軸は東門の建春門，西門金明門と二つの門の間にある大通りの一線と重なる。前出した『文選』巻三張衡『東京賦』李注に「謂東方為木，主仁，如春以生万物。（中略）西為金，主義。」とあり，鄴城の「金明門」，「建春門」がこのような陰陽五行思想によって名付けられたと思う。

唐の長安城の中軸線にも陰陽五行的な意義が付会されていた。唐の長安城の縦軸は明徳門，朱雀門，太極宮，玄武門の一線に位置している。この縦軸上にある主要な城門，宮室の名称がいずれも陰陽五行思想によって名付けられたのである。たとえば，陰陽五行思想によれば，南方は火の方位であり，火は「明るい」という性質をもっているので，郭城の南壁の中門が明徳門（「徳」は性質の意味）と名付けられた。朱雀，玄武はそれぞれ南方，北方の神であるため，皇城の南門，宮城の北門はそれぞれ朱雀門，玄武門と名付けられた。同様，唐の長安城の横軸にある春明門，金光門も陰陽五行思想に従って名付けられたのである。

Ⅲ　中軸線の形態の変遷

本節で使われる「形態」という言葉には，二つの内容が含まれている。その一は中軸線の位置であり，その二は中軸線の形状である。

前述したように，中国中期封建社会以後，都城の中軸線は，東西方向の横軸と南北方向の縦軸より構成する。つまり，中国封建社会以後の都城の中軸線の形状は一般的に十字形になっているのである。都城の中軸線の位置をみれば，ほとんどの場合，中軸線の縦軸は郭城，宮城の南・北の城壁の中門及び太極殿のような主要宮殿を通過し，横軸は東・西の城壁の中門を通過する上，宮城あるいは皇城の南壁の南側を通過する。しかし，中国中期封建社会以前の都城を

無断転載禁止。

みれば，その中軸線は必ずしもこのような形状ではない。以下では科学的に発掘され，その中軸線の形態が比較的に明晰であるいくつかの都城を例にしてみておきたい。

1．東周時代の都城

1）魯の曲阜故城　曲阜故城の縦軸はおそらく周公廟に位置する宮室遺跡，9号道路遺跡，高門の一線に位置する。曲阜故城の横軸は不明確である。曲阜故城の城門の名称については，『太平寰宇記』巻二一に「東有二門，其北名上東門」，「西五門，第一門曰鹿門。（中略）第三曰稷門。」のような記載があるが，記録されていない城門名が多い。発見された城門遺跡と『左氏傳』などの記載と照らし合わせ，曲阜故城の発掘者は南壁の東門が高門，南壁の西門が雩門，東壁の北門が上東門，東壁の中門が東門，と比定した。これらの城門名に陰陽五行説に関係するものはなさそうである。

2）鄭韓故城　鄭韓故城の縦軸は西の郭城の南壁の中門，宮城の南壁の中門，宮室遺跡，宮城南壁の中門，西の郭城北壁の中門の一線に位置し，ほぼ正南北方向をしている。この軸線を中心として対称的に建てられた建築遺跡も発見されている。曲阜故城と同じく，鄭韓故城の横軸は不明確である。文献に記載されている鄭韓故城の城門名に「時門」，「南門」，「純門」，「閨門」などがあるが，陰陽五行思想に関係するような城門名はなさそうである。

3）燕下都故城　燕下都故城の縦軸は老姆台，張公台，望景台，武陽台，老爺廟台の一線にあり，方向は正南北ではない。横軸はまだ発見されていない。

4）邯鄲故城　趙の邯鄲故城は「趙王城」とよばれる部分と「大北城」とよばれる部分がある。学界では一般的に「趙王城」とよばれる部分が宮城に相当する部分で，「大北城」が郭城に相当する部分であると考えている。「大北城」の発掘は非常に不十分で，中軸線らしいものが発見されていない。「趙王城」から，二つの縦軸が発見されている。その一は「趙王城」の東城にあり，南将台，北将台などの大型建築遺跡を通過するもので，二つ目は「趙王城」の西城にあり，龍台などの大型建築遺跡を通過する。この二つの縦軸はいずれも正南北方向である。

5）紀南城　紀南城の縦軸は，均台，冀家湾の一線にあり，この南北方向の直線が所在するところで数多くの大型建築遺跡が直線状の配置を呈して発見されている。紀南城からは横軸が確認されていない。縦軸はほぼ正南北方向である。

以上の東周時代の諸都城の中軸線に次のような特徴があることが確認できる。

（1）横軸は不明確。
（2）縦軸は城門，大型建築などで表現される。
（3）縦軸の方向は必ずしも正南北方向ではない。同時に，縦軸は必ずしも都城の中心部に位置しない。
（4）中軸線の上に位置する城門，宮室の名称には陰陽五行思想に関わるものは確認できない。

2．秦漢時代の都城

前漢の長安城の中軸線について，本文の冒頭の部分で述べているので，ここで略言したい。後漢の洛陽城の場合，その中軸線の横軸は不明確であるが，縦軸が二つあると思われる。一つは南宮の主要建築から南へ，平城門を通し，郊外にある明堂，霊台の間を通過するものであり，二つ目は北宮の主要建築から南へ延び，小苑門に達する直線である。前漢長安城と後漢洛陽城の中軸線の特徴が次のようにまとめられる。

（1）横軸は不明確であるが，明帝以後改築された宮城に横軸らしいものが存在する。
（2）縦軸は城門，大型建築などより表現される。
（3）縦軸は正南北方向であるが，縦軸は必ずしも都城の中心部に位置しない。
（4）中軸線の上に位置する城門，宮室の名

無断転載禁止。

称は陰陽五行思想に関係する。

3．魏晋時代の都城

1）鄴城　鄴城の中軸線は，横軸（建春門，金明門の一線）と縦軸で構成されている。縦軸が後漢の洛陽城と同じく，二本ある。その一は聴政殿，広陽門の一線にあり，その二は文昌殿，中陽門の一線に位置する。

2）北魏の洛陽城　北魏の洛陽城も横軸（東陽門，西陽門）と縦軸（太極殿，閶闔門，銅駝街，宣陽門）で構成されている。しかし，その縦軸は一本しかない。

魏晋時代の都城の中軸線の特徴を次のようにまとめられる。

（1）横軸は明確になった。
（2）縦軸は城門，大型建築などより表現される。
（3）縦軸の方向は正南北方向である。縦軸はほぼ都城の中心部に位置する。
（4）中軸線の上に位置する城門，宮室の名称は陰陽五行思想に関係する。

Ⅳ　漢唐時代の都城の中軸線と古代ローマの都市

古代ローマの都市計画の中で，中軸線と類似しているものが存在している。古代ローマの人が都市を創建する時，まず鳥占いあるいは動物の肝臓で占いを行い，建設しようとする都市の中心になる場所を定める。デクマヌスという東西方向の道路の設計線とカルドという南北道路の設計線の交叉点を上述した中心に合わせる。計測にはデクマヌス線を定めるための道具グロマを設置し，太陽で真東を定める。次に，観測地点でデスマヌスに直角の線を引くと，カルドが簡単にできあがる。このようにして得られた二本の基準線上に，都市の計画面積に応じて，二本の基準線の交点から等距離を測る。二本の基準線と城壁の設計線との交点に，主要な城門が建設される。したがって，都市には，四方位に一基ずつ，城門が四基建造される。続いて，二級道路を碁盤目状に引いて，より詳細な設計を行う。カルドという南北道路の意味は「回転軸」で，天空がその周りを回っているように思われる軸である，当時，「力」の軸であると考えられていた。前出した『周礼』，『詩経』の記載によれば，中国の古代都市の中軸線の引き方は，まず占いによって，あらかじめ選定した地域の中で都市の建設用地の中心点を確定する。中心点を確定してから，「臬」とよばれる木の棒で太陽の影を測定し，東西の方位を求める。この東西方向の直線に垂直の直線を引き，南北の方向が得られる。両者を比べれば，類似性があることが認められる。異なるのは，古代中国の場合，亀卜で都市の中心点を求めるが，古代ローマの場合，鳥占いでこれを求めるだけである[7]。

「臬」のような測量器具で太陽の影を測るとき，もっとも大切なのは，測量器具を水平面に対して垂直に立つことである。『周礼』賈公彦疏によれば，測量器具を水平面に垂直に立てるために，「臬」の上部に八本の縄をつけ，この八本の縄が全部「臬」と平行すれば，「臬」は水平面に垂直に立てていることになる。驚くのは，古代ローマで「臬」と同じ役割のある測量器具のグロマも同じ方法を使って器具の垂直を求めるのである。

古代中国と古代ローマの都市建設に存在するこのような類似性が非常に興味深いことであると思う。このような類似性が文化伝播の結果であろうか，もしくは文化伝播に関係なく，古代の中国とローマでそれぞれ独自に発生した類似の文化現象であろうか，これは今後追究すべき課題であると思う。

Ⅴ　おわりに

これまで見てきたように，古代中国において，現在の学界に中軸線とよばれる都城計画基準線はおそらく原始社会の末期に発生したようである。『周礼』などの文献によれば，中軸線は東

無断転載禁止。

西方向の横軸と南北方向の横軸より構成する。仰韶文化，龍山文化の住居遺構をみれば，家屋の向きはほとんど南向きであった。南向きの住居は日当たりがもっともよく，住居内の保温，除湿，日光消毒にもっとも適合するためだと思う。このために，原始時代において集落を作るとき，南の方角を測定することはとても重要のことであった。東周時代の都市に対しても，住居を南向きにすることも非常に重要のことである。したがって，南北方向になる縦軸はより重要であるが，横軸は，ただ縦軸を測定するときの補助的な手段にすぎない。これは東周時代の都市の横軸が不明確の原因であろうと思われる。『周礼』にある中軸線に関する内容が中国古代の都市建設思想の技術的な中核であると考える。

東周時代になって，西方にある秦国で，陰陽五行思想は都城建設に影響を及ぼし始めた。「天人合一」の思想が秦国の都市建設思想に吸収され，「法地象天」という象徴的な都城建設法則が現れてきた。このような都城建設法則によってつくられた都城に，当時の主流的な世界観が溶け込んでいる。「法地象天」の思想が中国古代の都市建設思想の祭儀的な中核であると思われる。『周礼』を代表とする東方諸国で流行している都市建設思想の中で，このような内容が確認されていないので，「法地象天」の都市建設思想はおそらく秦で発生したものであろう。

秦漢時代に至って，儒家思想は社会の主流的な思想になった。王莽時代以後，古文経の台頭により，『周礼』などの古文経系の経典の正統性が認められ，『周礼』に記載されている中軸線の横軸も重視されるようになった。しかし，漢の長安城と洛陽城はいずれも先秦時代の都市の上で建設され，『周礼』の記載と全く同じの都市を建設するのは不可能であるため，この時代の都城の中軸線の横軸はなお不明確であるが，秦漢時代の後期に改築された宮殿プランに，横軸はすでに明確になりつつあった。一方，秦漢時代に至って，陰陽五行思想が儒家思想に吸収されると同時に，陰陽五行的な都市建設思想と儒家的な都市建設思想も融合した。このため，中軸線に陰陽五行的な意味が付会された。要するに，中国古代の都城建設思想は秦漢時代にすでに体系化されたが，具体的に都城建設にこのような都城建設思想を使うのは魏晋隋唐時代のことである。

古代中国の都城の中軸線に関わる技術的と祭儀的な内容は古代朝鮮半島の都城および古代日本の都城計画にも吸収された。一方，前述したように，これらの内容は古代西アジア・古代ローマとの関連も現段階で否定できない。このような関連は漢唐時代の文化の国際性の一側面を物語っている。

注

1）賀業鉅『中国古代城市規劃史論叢』中国建築工業出版社，1986年。

2）「偃師商城考古再獲新突破」『中国文物報』1998年1月11日。

3）陳直『三輔黄図校証』巻二，陝西人民出版社，1980年。

4）『呉越春秋』巻四及び拙著「論秦漢時期的都城設計伝統」『陳直先生記念文集』西北大学出版社，1991年を参照。

5）拙著「漢長安城の建設プランの変遷とその思想的背景」『阪南論集　人文・自然科学編』第32巻第3号，1997年1月。

6）詳細は前掲論文を参照。

7）ピエール・グリマル，北野誠訳『ローマの古代都市』白水社，1995年。

[付　記]

本稿は1997年度阪南大学産業経済研究所共同研究「隋唐文化の国際性」の成果報告の一部である。

（1998年4月13日受理）

無断転載禁止。